

加齋下申候、此者休雪意休ニ會申、瓜ノツルニハ瓜ガナリ、夕顔ノツルニハ夕顔ガナリ申候間、深事ハ有間敷候、

〔平家物語十一〕志度かつせんの事

去程に、渡邊福島兩所に残り留りたりける二百餘艘の船ども、梶原を先として、同じく廿二日の辰の一天に、八島の磯にぞ著にける、四國をば、九郎判官せめ落されぬ、今は何の用にかあふべき、六日の老やうぶ、ゑにあはぬ花いさかひはこゝのちぎりきかなとぞ笑れける、

諺書

〔諺草序〕われさきに、わらははべのおのこ、文字しるたよりにもなれかして、和爾雅といふふみを

つゝりて、既に梓人にさづけ侍る、されどもかの書はもはら、眞名にかたよりたれば、女文字ならでは解がたき言語などをば、皆是をもらしぬ、故に今又世俗になふる諺、兒女のいふ詞どもからのやまとの文どもに本づきたる、出所正しきをゑらびて、これをしるし、ちかき人のあつめおけるかなな文どもに、和語をとけるものあるをもひろひとりて、冊子となし侍る、もとよりつたなきことはざなれば、よし見る人もあらしとおもひ侍れど、かねてより、心を用ひし事、今更かいやりすても本意なければ、吾家の弊帯に加へ侍りぬ、門類のはじめに、先諺を擧たれば、名づけて諺草といふ、誠に無益のわざながら、ひねもす心を用ひざらんより、これをするは猶やむにまさらんかも、

〔毛吹草〕としごろ俳諧に心をよせ侍ける友だちのたれかれより、あふ毎にかたはらいたき事

共を云つ、たがひにそゝのかして、これをもてあそび侍、凡俳諧の徳義を思ふに、詩歌連歌の詞は申に及ず、あらゆる俗語に至る迄、大かた其嫌なく、ひろく云おけるにや、なべての人耳にうとがちすして、和歌の友となる事をのづからなり、略抑此度書集ける其品多し、先句體のそれぞれ指谷のあらまし、次には四季の詞戀の詞同連歌の詞も追加しけるは、今めかしき事也、扱又世